

巻 頭 言

論文をまとめる意義

仙台市立病院院長 渡 辺 徹 雄

仙台市立病院医学雑誌第43巻が発行となりました。本号には原著3編、症例報告8編が掲載され、更に2022年に発表された著書・学術論文・学会報告、および剖検記録、救急センターや各科のカンファレンスの記録が掲載されています。忙しい業務の中、毎年編集作業に取り組まれてきている刈部委員長はじめ編集委員会の皆様、査読委員の皆様のご努力に敬意を表します。そして誰よりも投稿頂いた方々に感謝申し上げますし、更に論文完成にあたり指導に当たった上級医の先生方に敬意を表します。

論文をまとめるにはいくつかの意義があると思います。まずは論文をまとめるためには論理的で科学的な考え方が必要になります。関連する論文を読む必要もありますし、自分の言いたい事を主張するための文章の組み立ても必要になります。さらに論文のタイトルを決めたり、どの写真を掲載するか、共著者の順番をどうするかなど、一度経験してみないと判らない悩みを乗り越え一つの論文が完成されます。これらの努力はかけがえのない重要な財産になると思います。

投稿された論文は他人のためにもなります。仙台市立病院雑誌には、ISSNという世界中の雑誌等を識別するための国際的なコード(0388-8878)が付いていて、医中誌WEB(医学中央雑誌刊行会)などで世界中(実際には日本中でしょうか)どこかの施設からでも検索を行うことができますし、当院のホームページ上にも論文が掲載されていて本文に無料でアクセスすることができます。学術論文の場合、その論文が他の論文に何回引用されたかという評価の方法もあります。当院のスタッフドクターの多くは大学などで研究を行い論文にまとめていますが、そのような論文はこのような事が評価の一つになると思います。臨床報告などの場合それ以外にも重要な役割を果たす可能性があります。まとめられた論文が、たとえ一人の患者さんでも、どこかの見知らぬ誰かの診断や治療の参考になることがあるとすれば、医療従事者としてこれ以上に素晴らしい事はないのではないかと思います。

昔、大崎市民病院の後輩のK先生に頼まれ、子宮筋腫が下大静脈まで進展した珍しい症例の手術のお手伝いに行ったことがありました。その経験をK先生が論文にまとめ投稿されました。月日が流れある日突然、東京のテレビ局からこの論文に関して詳しい話を聞きたいと私に電話がありました。誰かの眼にこの論文が止まったようで、沢村一樹、高嶋政伸、比嘉愛未が出ていたDOCTORS2というドラマの最終回のシナリオに採用され、我々2人の名前もエンドロールで流れました。

このようにまとめた論文は何処で誰が読んで、何の役に立ててくれるかわかりません。本号は診療部からの投稿のみで他の部署からの投稿が無かったのが残念でしたが、今後多くの方が自分の経験をまとめ、次号以降更に本雑誌が充実することを期待してやみません。